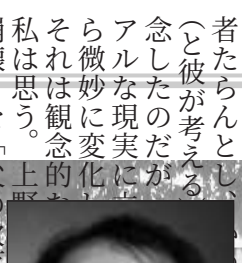
巻頭言

成熟と喪失から脱却する十年

総合科学研究科副研究科長
樫原　修



いる作品である。江藤の論を紹介しながらこれらの作品について語っていく時、私はほとんど若い頃の自分を語っているような痛さを感じる。彼ら彼女らの未成熟さは、私の（そして実は向こう側に座っている学生諸君の）姿ではないのかと思い、その自画像のあまりの愚かしさにたじろぐからである。

江藤自身は治[illegible]者たらんとし[illegible]（と彼が考える[illegible]念したのだが[illegible]アルな現実に[illegible]ら微妙に変化[illegible]それは観念的[illegible]私は思う。[illegible]崩壊」を「父の欠落」に置き換える問題[illegible]のたて方には何か[illegible]でなければ[illegible]えるからである。[illegible]描いて見せた[illegible]「目をそむけた[illegible]て見続ける[illegible]て忘れない[illegible]いかとも思う[illegible]

最後になっ[illegible]は『成熟と喪[illegible]であった。[illegible]余年が経っ[illegible]現在の問題[illegible]題であり続[illegible]である。学[illegible]うか？

江藤淳論の[illegible]問題[illegible]転倒、[illegible]誌がそう[illegible]なる[illegible]機会[illegible]江藤の著作を[illegible]読ま[illegible]江藤の著作は単に論理[illegible]を、江藤の一[illegible]思いがし、[illegible]読書であった[illegible]読しなのは、『成熟[illegible]喪失』[illegible]氏の解説の表題[illegible]名著である[illegible]

[illegible]年は[illegible]の〇年代に江[illegible]ゆる第三の[illegible]壊の物語を[illegible]近代」の問[illegible]江藤は、こ[illegible]一九六四年[illegible]ろ[illegible]に二年ぶりにアメリカから帰ってきたときに感じた、「あまりに急激に進展する日本の産業化に対するおどろき」があったと述べている。日本社会の伝統的な在り方を母性原理に見いだした上で、それが急速に変容する様を見たわけである。

江藤は、エリック・H・エリクソンに拠りながら、母性原理を「農耕社会的な」ものだとし、牧畜民の文化の父性原理と対比しているが、それ自体は、講談社文芸文庫版の『成熟と喪失』に付された解説で上野千鶴子氏がいうように、「ほとんど陳腐なものである」。しかし、その枠組みの陳腐さにもかかわらず江藤の論が面白いのは、実際に「母子密着」がおきるのは、「近代」にはいってから、中産階級のあいだでのことである。生産の場から放逐され、「母」であることにだけ存在証明がかかるようになった「専業の母」が成立してからのことである。しかもこの「育てる母」「教育する母」は、その成立の初めから、自分の「作品」、すなわち子供の出来で評価を測られるようになっていた」と上野氏が指摘するような事情を見逃していないからである。江藤は安岡章太郎の『海辺の光景』の母子が形成する小宇宙の機微を見事に描いていくが、母を捉えている感情が「伝統的な農民的・定住者的な感情のなかに安住しているなら」生まれるはずのないものだと書いているし、そうした小宇宙は成立と同時に自壊作